

---

# フルメタル・ブレイカー

カンドユウヤ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

フルメタル・ブレイカー

### 【Zコード】

Z7088F

### 【作者名】

カンドウウヤ

### 【あらすじ】

父親が経営するジャンク屋「テニトロン」を親子一人で支えているトーラン。今日も大好きな父親と一緒に仕事に出掛ける。目的地に向かう途中、砂漠で行き倒れになりそعداًت謎の青年セイムと出会つ。

## プロローグ&1話（前書き）

この作品は、数年前に書き始めた完全なる制作途中のものです。作品の冒頭であるプロローグと1話だけを公開します。この先、この作品の続きを書くかどうか定かではありません。読んでいただいた皆様の反響に基づいて検討したいと思います。

## プロローグ & 一話

### プロローグ

「マジで……ヤバ……かも……」

その少年の表情は、ゾンビのよつにやつれていた。

頭上でジリジリ焼き付ける直射日光。数えきれない光りの帯が収束し、乱反射をおこしている黄金色の粒子たち。

一粒一粒が連携し一つの集団を作ったとき、そこは見渡す限りの大平原を彷彿とさせる壮大な黄金パノラマを展開する。

吹き付ける風でさえ、その素肌を焦がさんばかりに吹き付け、噴き出す汗さえも熱を帯びた熱波は瞬時に蒸発させる。

人は、炎天下の中に居続けては命に関わってくる。ましてや、水分補給をしなければそれだけ死期が早まる。

そうと知つてか知らずか、灼熱のダブルパンチを受け続ける少年は虚ろな眼差しをただ前方だけに向け、歩みを刻んでいく。けして厚くないラバーソールは、細かな粒子の塊である砂地にすっぽり沈み、橢円形の足跡を形成するものの、浜辺の砂のように一瞬で形跡を失ってしまう。

搖らめく陽炎。

方角を知る術のない彼にとつて、方向感覚を失つたことは致命的な深手を負うことと大差ない。

息遣いが整えられる許容範囲を超えて、餌をねだる犬のように忙しく胸部を上下させる。

「飲み物……何でもいい……飲み物、くれ……」

喉は渴きを覚え、体は水分を求めている。

唇はささくれしたように力サ力サしている。何故、ここにいるのか？  
どうやって、ここに来たのか？

根本的なことを思い出させるだけの思考力さえも、この空間の凄まじいほどの影響力を前にして急激に低下してしまつ。

それでもなお、身体を制御している感覚は休ませる事を知らないかのように動かし続ける。

それが本能か、あるいは自身の意志の賜物なのか……知る者は、ただ一人……

「くつ、そつ……たらふく……水……飲んどきや……よかつた……」

限界に達した全細胞は一気にパワーダウンを起こし、ちづちづりに熱せられた砂上にその身体を倒す。

## FORTUNE 1

ホバークラフトに乗って、数十キロ、今日の収穫ポイントは砂漠地帯にある通“見えざる遺跡”

私の父さんから聞いた伝説として語り継がれている説話。

その昔、私達が住んでいた世界は多種多様な文化が混在し、精密な機械群が溢れる文明社会が存在していた。日々の生活を進歩した文明に依存していた人々は、それぞれに備わっている身体能力を使うことなく安易な考え方のもと生活していた。

唯一の道楽といえば、巨大コロセウムを舞台とした意志を持つメカロボット達の格闘ぐらいだつた。全てのものはそれら戦い傷ついた機体、バラバラに四散する部品やオイルといった機械のおぞまいすがたを目にし、人々は狂喜乱舞した。

だが、日々の暮らしに疑問を抱き、打ち破った人物が現れた。機械という万能の金属に依存し、人間としての本能が退化した世界を一転させる男が。

伝説の剣闘士シャープス・ダットン！  
グラディエーター

彼こそ、機械に洗脳されてしまった世界に一條の光りを射し込んだ英雄である。

それまで、意志を持つメカロボットばかりが決闘を演じてきたが、

シャープスは生身の肉体に簡素な防具を身に纏い、颯爽と計算づくされたメ力に戦いを挑んだ。

誰もが機械の絶対的権力の前に倒れると思った。所詮、生身の人間が冷血で感情を見せない機械に勝てるはずがないと。人々は口を揃えて言つた。

だが、シャープスは人々の予想を裏切り勝ち続けた。ばつたばつたと巨大な体躯をしたメカロボットを打ち倒し、何の迷いも怯えも見せない姿勢で挑む姿に人々は次第と魅入られ、何の感情もなくただ眺めていた戦いに感動と興奮を覚えていった。

シャープスの人気は次第に規模を拡大し、遠方からもその勇姿を一目見ようと訪れる人々は止まることを知らなかつた。人々は彼ら人間としての威厳や勇気をもらい、生きる喜びを知り生活を送るようになつた。

それから百年。有耶無耶になつてしまつた顛末から、推測として、反感を克つた機械たちと人間達が反発し、それが戦争へと続いたのだと伝承されている。

シャープス亡き後、衰退したその世界で再びコロセウムが開催されるようになつた。参加する者は、偉大な英雄シャープスに敬意を示し、その後戦いを開始する。

そんな剣闘士達のため、搜索費や改造費用をもらつて私達親子は生活を営んでいる。

「あ～あ、何だか砂ばつかり見てて、飽きてきちゃつた」

特等席に陣取つて座る助手席の左側は父さんで、私の右側には開放感で満ち溢れる風景が広がつてゐる。しかし、出發してから数時間、目的としている場所は遙か遠くにあるよつでいつになつても着く気配がない。

「まあ、黄色い砂ばつか見てりやあ、飽きてくるのも無理はねえよ実の父をお世辞にもなんて、という台詞を言いたくないけど、父さんの外見は格好良いなんて言えない。けど、仲間中では、『ジャングク屋のロイ』と呼ばれるくらい機械には詳しい。今私達が乗つて

いるバークラフトでさえ父さんと私が作ったものだから、それは証明されるはず。

機械についての広い知識と、ロボット犬にも匹敵する機械搜索の腕は一端の同業者さえ舌を巻くほど。その娘の私も、遺伝子には否めずそれなりの知識が備わっている。まあ、物心ついたときから商売の手伝いをしていれば、自然と身に付くよね。

「でも、こんなに遠出までして探すだけの価値がなきや、嫌だよ」「そう腐るなトーラン。俺達だって、商売しなきやメシの食い上げになつちまう。価値の問題してる前にな、報酬さえもらえりやあいいんだよ」

「何か、がっかり」「何がだ？」

「だつて、ジャンク屋のロイが、内容よりお金が先だあ、なんていうんだもの、格好良くないよ。その道を極める人間なら、『金の問題じゃねえ、俺のポリシーに関わる問題だ。依頼すンなら、希望以上の中を見つけ出してやらあ!』って言つたら、格好良いのに」一部分だけ父さんの理想像をモノマネで演じてみる私。さすがに喉を絞めつけて出す濁声は、纖細な喉を痛めちやいそつ。「若いヤツらばかりそんな陳腐な台詞を並べんだよ。年を重ねて、一人前になって初めて、『あつ、やつぱり金が無いと、生きていくないわ』って氣づくんだよ」

父さんも負けじとモノマネをしたみたいだけど、どこか気持ち悪くて追及できない。でも、父さんの考え方も一理あるかもしねりない。天地がひっくり返つてしまいそうな大きな戦乱があつた後なのだ、ポリシーがなんだのと糋がるより、まず己の懐を温めてからでも遅くないだろう。

「でも、父さんと一緒にいられるだけで、私、幸せだよ」「へッ、嬉しいこと言つてくれるじゃねえか。アイツ(・・・)にも聞かせてやりたかったなあ」「アイツって?」

ポロつと零した一言を、私はすかさず追及した。

「なつ、なんでもねえ」

「意地悪。隠さなくともいいのに。へるものじゃないんだし」

「何でもねえたら、ねえんだ」

「もつたいぶらないで、教えてよ」

焦った時の父さんは、すぐ表情に出てしまう。本当、表裏のない性格なんだから。

運転している父さんに、私は狭いスペースをものともしないで腕に擦り寄る。

「おい、運転中だ。寄るんじゃねえ」

「嫌だよ。教えてくれるまで、ずっとくつこちやうんだから」  
注意散漫に陥つてしまつほど、父さんの腕に頬擦りして私は答えてくれるようねだつた。父さんは迷惑がつていてるけど、私はこうしてるだけで答えてくれなくとも嬉しくて満足しちゃう。体臭がどうのこうのより、機械のオイルの染み付いた匂いが私には心地よかつたりする。

刹那、車体を襲つ奇妙な揺れ。

「つおつ！」

「キヤツ！」

異常を瞬時に感じ取つた父さんは、急いで停止させる。

「どうしたの？」

「分からん。分からんが、一応調べてみる」

いそいそと職人らしい目付きに様変わりして、父さんはホバークラフトを降りる。

私たち親子が作ったホバークラフトは比較的車体の大きさを抑えて設計している。後部には埋もれたジャンク品を取り出すためのアームが備え付けられ、その操作パネルは運転席とは別個にある。

それよりも前方には荷物をストックできるスペースがあり、何もなければそこを寝床代わりに使う。

ほとんどをこのホバークラフトと一緒に生活しているため、あち

こちガタがきている可能性もある。

砂ばかりが周囲を取り囲んでいるような場所に停止し、父さんは車体の後方に回り込んで地面と一番近くに接している空気を包んで浮かせる部分を点検する。検査方法としては、患者を診る医者のような目視や打診が一般で、精密機器を駆使した検査などは大きな都市へ行かなくてはできない。そんな機材がない私達は、できるだけ注意深く目を皿のようにして見る以外、対処方法がない。

「父さん。分かった原因？」

「何か下に潜つちまつたのか、それとも何かにぶつかつたのか……」  
運転席から身を乗り出して後部を見渡したけど、まだ点検が終わらないようで声は聞こえても姿が見えない。

「ねえ、早くしたほうがいいんじゃない。依頼人が怒っちゃうかもよ」

大声を上げて先を急ぐよう父さんに声を掛けても、返事が返つてこない。

「もう、仕方ないんだから」「

私だつて父さんの血が流れた一端の同業者。まだ一人前として認めてくれないけど、これでもホバークラフトと一緒に作つた人間。私にだつてできることがあるはず。

そうと決まれば、行動あるのみ。

颯爽と降りて、私は父さんのもとへ急ぐ。

砂漠へは何度も来たことはあつたけど、熱風の吹き付けるこの場所はどうも好きになれない。

「ねえ、何か見つかつた？」

車体の下部に潜り込んで、何かをしている父さんの姿を見つける。

「おう。何か、鉄クズみたいなもんが引っ掛けたみたいだ」

車体の中心部近くまで潜り込んで、父さんは引っ掛けたあるモノを除去する。数分が経過して、やつと出でるとホバークラフトの通行を邪魔したものを持つてくる。

「こんなモンが刺さつてたから、揺れちまつたらしい」

機械汚れのこびり付いた手で見せてくれたのは、円筒形をした手の平サイズの筒だつた。

「何、コレ?」

「光線刀の発生装置らしい。何でこんなモンがこんな場所にあるんだ」

手にとつて、私は警め回すよつに円筒形の物体を見回す。銀色の筒身、上部から中がのぞけるよつになつていて、下部には小さな半球状の出つ張りがある。

「どう使うの?」

「そのケツの部分に触れば刃が出る。最近、街で出回つてるものに似てるが、何か違うな」

一人で光線刀を見ていると、どこからか呻きに近いか細い声が聞こえてくる。

(うつ……たつ、たすけ……)

「きっと、通りがかつた誰かが落としたんだろう。まつたく、ろくなことしねえなあ」

ぶつぶつ文句を呟く父さんを尻目に、私は試しに作動させてみる。バチバチ ヴンッ!

「うわっ!」

何の前触れもなく飛び出した群青の光の刃は、私が想像していたものよりもかなりショボかつた。

「えつ、嘘。何だか、短くない?」

「ホントだな。出回つてるヤツは、もとよりも刃のほうが長いはずだ。不良品だな」

(なつ……なあ……)

「まあ、原因が分かつたことだし、もう行こうよ。遅くなると、作業時間が削られちゃうし」

飛び出した刃を戻す。

「そうだな。この暑さじや、ろくにできねえしな」

(ちょつ……と……)

喉の奥に刺さった魚の骨を取り除いたように、ホバークラフトの進行を邪魔していた「元凶」がなくなり仕事に戻れる。

「さて、捜索現場に向うか」

「ちょっと待つたああああああ！」

突然轟く絶叫に近い雄叫び。辺りには私達以外人はいなかつたはず。私と父さんは、それぞれの席に戻り周囲を見渡すものの、誰も確認できない。

「やっぱり、気のせいかな」

釈然としないまま父さんはエンジンをスタートさせ、ホバークラフトの下部に空氣の層を作り出す。

「気づけつつうの！」

半分怒氣を含んだようなテナー調の男の子の声が、吹き付けてくる熱風に乗つてかすかに聞こえる。

「誰かいるのか？」

父さんも聞こえたらしくて、再び外を見渡す。だけど、その発生源を特定はできない。

「やっぱり気のせいだよ。エンジン音しか聞こえない」

「そうだな、気のせいだな」

意見が一致して、もうその声には耳を貸さないことにした。

「おい！ いら！ ちょっと待てええ！」

声の主は、苛立ちを露にして運転席のある父の方に向つてきた。「俺を無視して行くつもりかよ。人でなし！ 野蛮人！ トウヘン

ボクつ！」

「何だい兄ちゃん。どこから來たか知らんが、氣をつけるこつた。砂漠は、弱きものなど跡形もなく飲み込んでしまう。ちゃんとした裝備と準備をしないと、たちまち干乾びちまうぞ」

「へえ～ そうなんですか。勉強になります」

父さんの真面目な態度に触発され、突然現れた鮮やかな紺色の瞳を持つた男の子は、バカ正直に納得している。

「つて、おい！」

でも、ツッ込みを入れる限りではそんな余裕はないらしい。

「何でい？」  
人がせつかく親切丁寧に教えてやつたのによお、どう

「教えては文句なんてありません。ただ、俺が、言いたいのは……」

その続きを語おうとしたのに、男の子は皿を回したようにその場に倒れこんでしまった。

「おい、言いたいことって何だ？」

「父ちゃん。そんなこと言ひしる場合ぢやないでしょ。倒れかけたんだよ、エリック！」

運転席から見下して砂漠の熱せられた砂の上でひてしまつた男の様子を伺う父さん。

四庫全書

「こんな所で行き倒れをせるわけにはいかないもんね。さすがは父

「いや、「イツが言おうとしていたことが気になるんだ。死なれち  
まつたら、目覚めが悪くてたまんねえからな」

「何か的が合つてゐるような、合つてないような……」

私と違う解釈だけれど、どうち道、男の子を助けるようだから一安心。

突然現れて突然倒れた男の子を、まだ荷を積み込む前のスペースに寝かせ目的地に向う。目的地へはだいぶ距離があるので計算していたので、その分の食料や飲料水などはあらかじめ持つてきている。近くの食料品店から買い揃えた材料で、この日のためにと私が作った料理ばかり。エヘッ、もちろん、父さんに食べてもらつため。また誉めてくれるかなあ。

「トーラン、腹」しらえするか」「さう、さう、さう、さう

待つてましたとばかり、荷物置き場と繋がる通路を使って置いて

ある手作料理を取りにいく。

逸る胸の鼓動を抑え、嬉しさで満ち溢れる顔を輝かせ父さんに食事をさせてあげる。走行中だから、そのままの体勢で食事ができることを考慮し、私は状況にぴったりの料理を作ってきた。

「特製のサンドwichに、ブルフ草で包んだから揚げだよ」

「おつ、なかなかいい匂いがするじゃねえか。いただくか」

「さあ、どうぞ」

一人でも食べ残してしまいそうな量を作つてきちゃって、どうしよう。父さん、結構食べるからいいよね。

「量が多くねえか?」

サンドwichを一つ渡した時に見えたみたいで、あまりの多さに田を丸くする。でも、食べてほしいな、全部。

「おつ、なかなか美味しいじゃねえか。だがよ、俺とお前が食うには多すぎるから、あの兄ちゃんが起きたら食わしてやれ。多分、ありやあ行き倒れだ。間違いねえ。危ねえ所を、俺たちは救つたらしい」

結局、全部食べるには至れず、余ってしまった料理を行き倒れ寸前だつた男の子にあげることにした。でも、どうして行き倒れるまであんな所にいたのかなあ。

あまり揺れることがないボバークラフトの荷物置き場で、横たわっている男の子を見つけ、私は飲料水の入った容器と食事を届けた。初対面の時は冴えない顔で怒り散らしていたけど、行き倒れ、命の危機まで陥つた姿を見ると不憫でならない。

どんな人物であつても、人一人の命を救えたことには変わりない。

「この人、とても辛い目に遭つたんだね」

男の子の側に食事を置き、私は屈んで顔を眺める。若いつて感じがするけど、私よりは年上みたい。

「うん、何の音?」

聞き覚えのある音。それも、毎日聞くような懐かしくて、耳障りな音。

「どこから聞こえてくるの？」

辺りを見渡しても、誰も寝てなんかいない。父さんなら、起きるはずだし……まつ、まさか！

視線を横たわる男の子に向けて、今度は注意深く耳を澄ませてみる。かすかだけど、確信の持てる規則正しいプレス。

「この人、寝てるの？」

確認の意味でもう一度耳を澄ませると、間違いなく寝息をたてている。

「気絶したんじゃないの？」

安心感が押し寄せたが、同時に間の抜けた脱力感も同時に私を包み込んだ。

それから目を覚ました彼、名をセイムといつみたい。起きたばかりなのにものすごくお腹が減ってるみたいで、余った食事を残さず数分の間に平らげてしまった。

「くはーっ、いやあ、久しぶりに食べると味なんかお構いなしに食えちゃうんだなあ」

容器に入った半分以上の量の飲料水を、まるで滝を流し込むように喉に流し込む。脱水症状を起こしかけているにしても、度が過ぎるほど一気に飲み干した。

「ちょっと、全部食べたっていうのに、マズイって言うの！ 失礼しちゃう」

「あの料理、キミが作ったの？ いやあゴメン。そんな失礼なこと、作った本人に言うなんて知らなかつたんだ。いつもなら、誰もいないところでぼやくんだけね」

「この人、私にケンカ売ってるの！」

堂々と父さんのために作ったサンドウイッチを食べたうえ、平気で文句を言うなんて信じられない。

「あなた、全部食べたっていうのに、文句を付けるなんてヒドいんじゃないの。もう、行き倒れたって何も作ってあげないんだから」

「そう固いこと言わないでさ、ポジング・ポジング」「何それ？ どこかの方言か何か？」

「俺の大好きな言葉だよ。ボジング。ポジティブ・シンキングの略で、何事も前向きに考える。その姿勢が好きなんだ」  
ポジティブねえ。砂漠で干乾びそうになることが、<sup>ポジティブ</sup>積極的なかな。

何を考え、何を思つているのかわっぱり分からぬ。そんな、行き当たりばつたりな性格でここへ来たのなら、バカが付くぐらいおめでたい人間に決まってる。

「それよりさ、アレ、見かけなかつた？」

「何よアレつて？ それだけじや、分かんないつて」

「ほら、アレだよ、アレ」

セイムは必死にジェスチャーを使い探し物の形を表現する。しかしながら、言つてることが支離滅裂に近い人間の言つことを、真に受けてまで協力するのも気が滅入つちやう。

「ん~もう、通じないやつだな。アレだよ、円筒形の筒。お尻のとこに、半球状の出っ張りがあるやつ」

「もしかして、コレのこと?」

どんどん話を聞いていくにつれ、さつき拾つたものに特徴が似ていた。

「おおおつ！ どこで見つけたんだよ、それ」

「これが車体の下に潜り込んで止まつちやつたの。だから、あなたを拾つたわけ」

案の定、走行を邪魔した異物が彼のものだった。まったく、迷惑なものをおつておくんだから。

「どこでこれ買つたの？ 不良品つかまされるなんて、あなたしくつていいんじやない？」

嫌みつたらしく言つてやつた私。こんな、見るからに怪しいものを売り付けられ、さぞ悔しいだろうに。

「失敬な、不良品かどうか保証できなければ、買つたんじやない。

自分で作つたんだよ。ガラクタを寄せ集めて、一からつくつたんだ  
よ

憤懣をみなぎらす、彼は歯切れよく言つ。

バカにしているようにしか聞こえないと思うけど、この光線刀が  
レーザーフレード

手作りなんて信じられない。この彼からして、機械の部品からこんな武器を作り上げたことが不思議でならない。

「へつ、へえ～、自分で作ったんだ。そうか、そつだよね」

何だよその顔。まさか、信用してないないな?」「凶尾。でも、そんな事を語らうが一歩も必死

国語でやそんが考へを心られない。必死に堪へる  
よくよく考えると、そんな必要性なんてないじやん。

「そんな、信用しないなんてないよ。ち

あなたらしい仕上がりになってるじゃない」「そり、そり? いやあ、苦労したんだが。そいつの呪がつた部

品書き集めて、一・二・三田<sup>ハタ</sup>ふつ通して作った最高傑作なんだよ。やつ

苦勞した甲斐があるよなあ

トイツ、ビリまでノーテンキなの。普通なり、文句の一つや二つ

出でここに之の元。

数分しか会話をしないのに、この男、セイムの性格が半分くらい分かつた気がした。

「うう、もう二度、油

お、すぐ目的地に到着するぞ。戻って来い。

運転席からの父の声に、一時忘れていた仕事内容を思い出し急いで特等席に戻る。

「なあ、目的地つて、何だよ?」

体力が回復したのか、両足で歩行して私たちが座っている席まで

置きに訪ねる

「お、元気になつたみてえだな」

私たちの仕事現場

や」と田代の外観を田視できるまで来ていた。

# “見えざる遺跡”

その名の通り、この遺跡は過去の世界を封じ込めたかのようにありありと昔の様子を物語っている。

定説によると、この一帯に広がる砂漠地帯には昔、文明社会が存在していたらしい。復興が進んでいる今の都市よりも規模は小さいものの、確かに文明の香りを今に伝えている。見えざるというのは、一年の間この周辺は激しい磁気嵐が発生するポイントと重なるため、下手に近付いてしまうと全ての機器が影響を受け、たちまち使い物にならなくなってしまうのである。

嵐だけあって、金属に吸い付けられるように、磁気を帯びた砂の粒子が人目に付かないようカモフラージュする。自然といふコントロールの出来ない環境が覆い隠しているのだ。

だから、こんな風に人間の前に姿を出すこと自体珍しいらしい。

「さて、取り掛かるとするか」

「了解！」

セイムは物珍しそうに眺めているけど、構つている暇なんて持ち合わせてない。

助手席を勢いよく降りたのと同時にホバークラフトはバックし、180度方向転換してまたバックする。

その間に私は目測で周囲を見渡し、搜索ポイントを決定する。決定したと同時に、サイドミラー越しに確認する父さんの腕でホバーラフトをポイントまで操縦する。そこでも、私は距離感がつかみにくい事を考慮して合図を送る。

さすが親子の為せる技。これほど息のピッタリ合いつコンビは、どこを探しても見つかりっこない。

私の先導のもと、ホバークラフトは寸分の狂いなく指定場所に止まる。フツ、いつもながら素晴らしい腕前。自分でも惚れ惚れしちゃう。

休む間もなく、父さんはクレーンの操縦パネルに向かう。私はクレーンがポイントに来るよう下で指示を出す。その様子をセイムはポカーンとアホ面を下げて見てている。何を考えていることやら。私

の腕前に惚れるなよ。

重厚なクレーンのアームが砂を磨り潰して動き出し、周囲に心地いい機械音を奏でる。

「もうちょっと右、右、右……うん、その辺り！」

傾きながらも見事に動いたアームの先端に取り付けられているワイヤーを引き出し、引き上げるジャンク品に取り付ける。

「いいよ、引き上げて！」

ここからが勝負どころ。機械の部品といつても大小様々。それに、百年前というヴィンテージが付くとなると脆いものもある。商品を傷めるわけにはできず、慎重に慎重を重ねて作業をする必要が纏わりつく。

固睡を飲んで部品がそのままの原型を保つことを祈りつつ、目を離さず引き上げる様を見守る。

慎重にワイヤーを巻き上げ、クレーンは左回りにホバークラフトへ戻る。その間に荷物置き場の天井を開きそこに納める。

「ゆっくり、ゆっくりだよ……」

父さんも私も思つことはただ一つ。無事に荷を積める事だけ。

固睡を飲み込む父さん。その音が聞こえてきそなほど、緊張感が張り詰めている。かなりの腕の父さんであつても、荷を積む瞬間ばかり動悸が激しくなる。

ギッ ギィイイッ

ワイヤーの軋む嫌な音が波紋する。どうか、無事でいて。

ホバークラフトの上空まで到達する。あの大きさならすっぽり入るだろうか。

金属の擦れる音が不安感を搔き立てる。ああ～つ、聞いてられないつ！

アームが沈んでいく。その後、微妙に車体が砂に沈む。成功した！

「やったあ、積み込み完了！」

緊張感が解れ、嬉しさと喜びが体の隅々まで広がる。この感覚が父さんの手伝いをしてて一番の爽快感を与えてくれる。

「よお～し！　トーラン、この荷を慎重に梱包するわ」

「了解！」

操縦パネルから合図を送つてゐる父さんと、ビビッキのスマイルを見せる。そして、すぐさま次の作業に入る。

荷物置き場に置かれたジャンク品は、クレーンに繋がれ不安定な体勢をとつてゐる。このまま積み込み走行してしまえば、大事な商品が傷つてしまつほか、最悪の場合は破損してしまつ可能性もある。その危険性を最小限に食い止める作業の中に、梱包というものが含まれる。

慎重に上部に付けられたワイヤーを外し、そのまま全体を覆つよう特殊な纖維で編み込んだ黄色の布を被せる。この纖維は、主に破裂した破片などから器材を守るために作られたもので、最近では部品などの精密機器の梱包にも使用されている。

引き上げたジャンク品の形に添つて父さんと一緒に包み、その上から運びやすくするためフック付の止め金を巻きつけ完成。これで後は持つて帰れば、お金が手に入る。めでたし、めでたし。

「けつこうちよろかつたな、今回の依頼」

「そうだね。いつもなら、もっと時間をかけて捜索するのに

長年に渡りこういった仕事をしていると、自然と手応えというものが感覚として体に染み付き、職人魂を磨いてゐる。そう、その感覚が充実感を与えてくれない。

「お～い、ちょっと！」

久しぶりに聞いたような気がする、とんちんかんなヤツの声。運転席の方から聞こえてくる。

「ちょっと行って見て來い」

父さんの指示を仰ぎ、一段落のついたこの場から運転席に向かう。そんな時、どこからか砂を擦り合わせるような音が耳に届く。

「何、どうかしたの？」

運転席の隣、私の特等席を横取りしたセイムは目を細め前方を指差している。何か見えるのか。

「さっきから、モゾモゾ動いたのがこっちに向かってるんだけど」「モゾモゾ動くもの？」

そんなもの聞いたことがない。だが、自分でも確認する必要があると思って、私は運転席から乗り出し双眼鏡を覗く。すると、遠方から「わわ」と砂埃を巻き上げる一团がこちらへ向かって来る。

「あれ何！」

「ねつ、来てるでしょ？」

呑氣にもほどがあるくらい、セイムは紺色の瞳を欠伸の涙で潤している。

「何でそんな呑氣に構えてんのよ！ あ～っ、もう一・構つてる時間さえないのに、このどつしつと構える態度。イライラしていく。」

この事態を急いで伝えるべく、荷物置き場の父さんのもとへ駆け出す。あれは一体なんなんだろう。

「父さん！ 何か分かんないけど、大群がこっちに向かって来てるよ」

「何でい、何かつて？」

この会話だけじゃ把握するはずもなく、確認のため運転席に向かう父さんの背中を追う。

「あっ、ありやあ……」

「どうしたの、何か知ってるの？」

双眼鏡を覗いたまま、父さんは絶句した。一体、大群でこっちに向かって来るのはなんだろ？。

「ありや、砂鎧鼠だ」  
サバンヤシロジロ

「えつ、こんな場所にアルマジロがいるの？」

「ああ、噂に聞こちやいたが、まさかあちらから現れるとは思わなかつたぜ。砂鎧鼠。あいつらは昔、こいいらにいた人間達を作られたナノマシンや。こここいら一帯に形状記憶合金の粒子をばら撒き、アルマジロになるようプログラムされた合金は、普通は砂と同化し

て分からんが、外部から敵が侵入してくると察知して姿を変え、襲い掛かる防衛兵器。人つ子一人いなくなつたつてのに、今の今まで

仕込まれたプログラムに従うなんざ馬鹿げてるぜ」

防衛兵器。彼らは、戦争があつたことや守るべき人達がいなくなつたことさえ知らず、今日私達を侵入者と見なし、過去にプログラムされたマニュアル従つて行動している。

「つてことは、ここにいたら危険つてことじやないか！」

ここでの反応は人並みだつたけど、ギャップの大きさは尋常じやないつて思った。

「ここにいたら奴らの餌食になつちまつ！　すぐに発進だ。トーラン、荷物置き場のトロ、チェックしてこい！」

「りよ、了解！」

善は急げ。そんな言葉が当てはまるけど、そんな余裕ある訳もなく、急ぎ足で荷物置き場の様子を確認しに行く。父さんが最後の後始末をしていたおかげで、積み込んだ荷が崩れる心配はなさそう。出入り口のハッチを閉め、ロックする。

行つたと同時に、父さんが運転するホバークラフトはエンジン音を上げゆつくり動き出す。足を取られながらも、確実に歩を鉄製の床に踏みしめ操縦席に戻る。

「どう、何とか撒けそう？」

運転席の父さんの顔を覗き見ると、いつも優しい表情は姿を隠し、男らしく険しい表情で覆われている。やっぱり、カッコいいなあ。

「さて、俺達が作ったコイツ（ホバークラフト）が勝つか、アイツ（サンドアルマジロ）らが追いつくか……」

父さんは、走らせるホバークラフトのサイドミラーでサンドアルマジロとの距離を測定する。こんな精悍な顔つきをしたら、他の女の子達が放つておくはずないだろうなあ。

ホバークラフトは、一目散に“見えざる遺跡”を離れ、サンドアルマジロの反対方向へ走り出す。

アルマジロの数は砂漠の砂と同化して確認できないし、相手のスピードに勝てるか心配になってくる。

「ねつ、大丈夫だよね？ このホバークラフトって応戦する武器とかついてるよね？」

「あるわけないだろ！ 大体、こつちは民間の小企業だぞ。そんなものに金掛けられるか！」

妙に説得力のある一言。こんな状況でよく言えるなど、半分尊敬の意を送りたくなる。

「じゃあ、あいつ等に攻めて来られたらどうするんだよ？！」

セイムの一言に私と父さんは見詰め合ってしまう。キヤツ、恥ずかしい！ つて、言つてられないつて。

「どうしよう！」

「どうしよう！」

ほぼ同時に声を荒げ、士気が下降してしまつ。大変な事態になってしまった。

「よしそ、こくなつたら俺の出番だな」

何を思つたのか、のほほんと座つていたセイムが突然立ち上がり、通路を塞いでいる私に手で退くようジョスチャーする。

何よいきなり。緊急事態だつていうのに、どこへ行くのよ。まつ、席が空いたわけだし、これで父さんの顔をじつと見てられるし、側にいられるし嬉しいかな。

席を離れたセイムといつと、案内さえしてないといつのにじんどんどん進み、クレーンの操縦パネルのある後部まで行つてしまつ。一体、どうしようか。直にでもサンドアルマジロを見たいのか。

「やばいぞ！ アイツら早い」

父さんが発した危機感。私も思わずその様子を確認するため、窓から身を乗り出して見る。熱風を切つて進むホバークラフトから見た光景は、一体のアルマジロの姿を確認できるまで距離を詰められている。

砂と同化しているとあつて、身を守つている皮膚は模様を取つて

しまつと区別できなくなつてしまつ。前足と後ろ足には見た目可愛らしい爪が付いている。

だが、その可愛さと裏腹に、強靭な手足からホバークラフトさえ凌ぐスピードを生み出している。まさに、防衛兵器の名に相応しい働きをしている。

「まずいよ、追いつかれちゃう」

「くっそおおおお！ このエンジンじゃ太刀打ちできないのか！」

父さんが吠えた。こんな時の父さんは、周りが見えなくなつてしまつほど集中している。隣に私がいることさえ分からなくなつてしまう。でも、カツコいよなあ

その時、突然ホバークラフトが揺れた。車体の後部付近に、とうとうサンドアルマジロが追いついたらしい。

「嘘つ！ もう追いついたの？！」

もう一度後方を確認してみると、アルマジロの群れが固まって車体に体当たりしている。

「クソッ！ 振り切れねえ！ テーラン、これを使ってアイツらを追い払うんだ！」

懐から取り出したのは、第一印象から銃だと認識できる。それにしては、どこか歪な格好をしている。

「そいつは、スタンライトガン高压電気銃（ガン）って言つんだ。撃つと電気玉が発射して、命中すつと痺れちまう。護身用で使うんだが、非常事態だ。充電が切れるまでぶつ放してこい！」

武器と励ましの声を私にくれた父さん。私だって機械技師の端くれ。機械を使いこなさなくては、一人前とは認められない。

両手で受け取った私は、決心を固めて父さんと一瞬だけ目を合わせて頷く。そして、攻撃されている後部へ走る。

使い方なんて教わらなくつたつて、受け継がれる父さんの血が私にも流れている。だから、何とかなる。いや、なんとかしてみせる！ 固い決意と、父さんや父さんと作ったホバークラフトを守るために私は向かつた。

「あれ？ どうしてここにいるの？」

車体の後部、クレーンのある操作パネルまで来てみると、やつを  
いなくなつたセイムがいた。

「どうして来たんだよ、ここは危ないぞ」

何となく性格が変わったような……明らかに、口ぶりはなつきとは  
は変わつていて。

「あつ、あなたこそ、ここにいたら危険じゃない」

「分かつてゐるけどさ、恩返しをしたいと思つてね。助けてくれたお  
礼を、ね」

「『シシと微笑みセイム。』こんな状況でも、彼は何かを貫いつとする姿勢があるみたい。

「お礼？ どんなことするの？」

「うつするのやつ！」

ビシッ バリッ

刹那、一頭、いや、一体のサンドアルマジロが軽々と砂地を蹴つて乗り込んでくる。その瞬間を、彼はいつのまに手にした鉄製の道具を使い叩き落した。静電気が発生したかのような、短時間のスペークが私の目の前で起こつた。当たつたサンドアルマジロは、原型のまま風に揺られる木の葉のように、静かに群れの中へ消えていつた。

「いつ、今のは、何？」

「ふつ、危ない、危ない」

セイムは、軽い屈伸運動をした後の爽快感に満ちている。手にした円筒型から出でている群青色の光の束。それは、ホバークラフトの走行を邪魔し、持ち主セイムに返したレーザーブレード。このちんけな武器が、サンドアルマジロを撥ね退けたつていうの。

「まったく、いきなり仕掛けてくるなんて、ルール違反だつての」

「まつ、まさか、その武器でやつつけつちやつたの？」

「そうに決まつてるだろ。素手で殴つたように見えるか？」

私の聞いた愚問に、セイムは少し憤懣氣味に答える。

「だつて、そんなちつこい（多分、手の平ぐらいの長さ）ブレードで飛び込んで来るアルマジロにヒットするなんて、信じられないんだもん。」

「そういえば、人の手がスパークなんてしないよね？」

「そうだろ、って言つてる場合じゃない！　まだ追い返したわけじゃないんだ。ここは危険だ、キミはご自慢の特等席に戻つてろ！」

「何よ、その棘のある言い方！　私だつて、自分の身ぐらい守れよ」「守るも何も、護身する武器がないじゃないか！」

「と、また、一頭のアルマジロが捨て身に飛び込んでくる。そこを、私はさつき父さんから預かつた銃で撃ち落す。と、まではいかなかつた。」

「あれ？？」

「私の勘が正しければ、このまま引き金を引けば電気の小さな球体が発射して命中するかしないか分かんないけど、確実に発射したはずなのに。」

「ウソ～つ、出ないはずなのに……」

打ち落とすはずのサンドアルマジロは、空中で縮こまつて体を丸くし急降下する。砂とはいえ、記憶合金で構成された防衛マシン。直接体のどこかしらに当たればダメージを受ける。

サンドアルマジロの軌跡を私はじつくりと見ていた。ぶつかるつて思うのに、何故か体は危険を回避するはずの本能が働かず、じつと杭のように止まっている。心がそうしているのか。現実から逃避しようとする弱い心が。

「う、あうつ……」

見上げ続いているのに突然視界が陰る。

ビシッ バリッ

また空気が、景色がスパークする。私の前に立ちはだかったのは、セイムだった。

「使えない武器なんて、ただのおもちゃだ。使いこなせないなら、

「うちに来るな」

彼の本旨として言いたいことを私は悟った。私を傷つけないよう  
に、優しく遠まわしに伝えたかったのは、

?足手纏いだ。女子供は下がつてろ?

そんな気配をさせないよう言いつもりでも、私の心にはほつき  
りとしつかり伝わった。

やつぱり、自分の命を削つて人は何かを守らうとする。その言葉  
を照らし合わせれば、守ろうとしているのは、私や父さん、そして  
このホバークラフト。そして、武器を手にして危機から守ろうとし  
ているのは、セイムなんだ。そんな彼の足を引っ張るようなことを  
私はしていた。加勢するのではなく、余計に事態を悪化させている  
私。

どうしようもない私。

何もできない私。

他人に迷惑を掛けてばかりの私。

そんな人間に誰かを守る資格なんて、無い。

「……」

返す言葉さえ生み出すことができず、へたり込んでしまう私。私  
には機械の技術を取つてしまえば、何も無くなってしまう。そんな  
今的心境だった。

「どうした、お腹でも減つたのか? やつを食べたんじゃないつけ  
?」

影を作つている男、セイムが「冗談ともれな」下手な笑いを繕つ  
てくる。でも、笑える状況じゃないよ……

「……明るくしようとしてるでしょ?」

「分かつた? 何事も、ポジングつてこと」

「根が明るいあなたなら、その言葉が通用するけどね……」

複雑な思いが、胸の奥深くで巻きついてるよつた気分。  
いろいろな感情がごちりやじりやになつて、目を回しあつなくらい  
あれこれ襲い掛かつてくる。

へたり込んだままの私は、両手でも收まりきらないスタン・ライト・ガンを見下ろす。こんな機械銃が使えないなんて……と、思った瞬間、トリガーの上に細かいミミズのような文字が彫つてあって、更に上にはボタン程度の大きさのスイッチがある。

『使い方の分からん機械音痴な君く。』これを押すと一発充電完了。あとは、好き勝手に撃つてくれい』

ナニイイイイイイイイ！

いつ、いくら使い方が分からないからって、本体に説明を彫りこむなんて、チヨー人を見下して。でも、父さんなら許せるよつ。

「セイム……私だつて人の一人や一人、守れないはずないよ」

「どういう意味さ？」

その間にアルマジロを一・三体跳ね除け、牽制をしているところで私はゆっくりと立つ。

諦めモードに入っちゃいそうになつたのに、父さんつたら、意地悪なんだから。

「こんなの、誰でも使えるつてこと…」

弱気な私から一転、今にも誰かを殴りそうな勢いで銃身を握り締め、左手の人差し指で乱暴にスイッチを押し付ける。

ブンツ　ピイン

これが充電完了の合図らしい。

「さあ、どこからでもいらつしゃい！」

私の挑発にでも乗つたかのように、勢い良く今度は三体のアルマジロが空中を舞う。

「私と、父さんの愛の結晶を、誰にも傷つけることなんて許さないんだら！」

ビュイイイイイン　バシユツ

銃口を蒼天高く向け、寸分狂いなく襲い掛かるアルマジロ達に放たれた電気球。周囲を眩い閃光が迸り、ミサイルが標的に命中したかのような光のドームが形成される。

「キャアアアアツ！」

「うあああああ！」

所変わつて運転席。一人、後ろを危惧し続けている父さん。

「トーラン、大丈夫か……やつぱ、心配だ」

武器を持たせ、サンドアルマジロ達からホバークラフトを守るよう任せたが、やっぱり気掛かりでならない。危険だと分かつてなおきながら、女である前に一人娘のトーランを行かせるなど親として失格だ。もし、ケガでも負つてしまつたのなら、なおさら追い詰められてしまう。ああ、なんてことをさせたんだ。

後悔の念で押し潰されそうな父さんは、操縦桿を握りため息を一  
つ。

「おわつ！」

突然襲う違和感のある揺れ。砂が隆起した山をかすめたのと違つ  
横搖れが、運転席、車体を覆う。

不信感に駆られた父さんは、意識をしつかり保ち左右に田配せし  
異常がないかを確かめる。左右にないことを知ると、追い掛けてい  
るサンドアルマジロの姿を窺う。

「んつ？ いないじゃねえか」

サイドミラーに映し出されていたのは、ホバークラフトの車体と  
後ろに伸びていく砂埃。不審者として追い掛けられていたはずな  
に、どうして姿を消したのか。

「トーランが、上手いこと追い返したんだな」

疑惑が確信に替わり、もう敵の追つ手がない」と悟ると走らせ  
るホバークラフトを停止させる。

また、静寂な砂の世界が広がつた中に止まる一台の車体。追つ手  
を逃れ、やつと一息吐ける。

車体の受けたダメージ程度を把握するため、

父さんは運転席を離れ、クレーンの操作パネルのある後部へ行つて  
みる。

「どうしたんだ、一体……」

父さんが田にしたもの。それは、狭い空間に倒れた私達だった。

どうして氣絶なんかしてるんだろう。別に田を回したわけでもないのに、こんな広くもないスペースで意識を失ってるんだろう。流れているはずの景色がいつの間にか静止像になつてるし、田を開けて最初に見たのは逆さになつてている父さんの姿だった。

「……あつ、父さ、ん？」

「トーラン！ お前……」

どう、どうして怒つてる田なの。それに、起こつている自体何か変。私、サンダアルマジロの魔の手からホバークラフト、うんん、父さんを守つたはずなのに、どうして不機嫌なの。

「どつ、どうしたの？」

「お前……まだ真つ昼間なんだぞ。その上、素性の知れないヤツと、こんな所で……」

不機嫌さが増していく様子が、年輪を重ねた渋い表情に現れてくれる。一体、何の理由で……

「えつ？ 私は、ただ……」

「しらを切る気だなトーラン父親が側にいるつてえのに、情けない。ひつじょーに情けない！」

なつ、何が情けないの。父さんにどんなヒドこじとを私はしたっていうの？

私を哀れみの田で見ている姿が、なんとも痛々しくてこちままで悲しくなつてしまつ。

「ねえ、どうしちゃつたつていつの？」

「俺はな、人の個人的なことに関しちゃ文句は言わねえ。ましてや、最愛の娘でもだ。だがな、真つ昼間からこんな開放感満点の場所でやるのは許せん」

「えつ、何をやるつて？」

父さんが何を言つているのかさっぱり分からぬまま上半身をもたげると、自分の目を疑つてしまつ状況であることにやつと気づく。

「うわあ～っ！」

驚いた私。こんな姿を見れば、父さんだつてきっと驚くはず。

砂漠という生きるものにとつて過酷な場所を、できるだけより良くな過ぎるためには身なりを整えることから始まる。私の今の服装は、俗に言つ? 砂漠スタイル? といつもので、主に通気性や直射日光から身を守るようを作られ、全身白衣のような白色で統一してある。その上、未熟ながら私のあまり色氣を感じさせない脚を隠すように、纏っているスカートは大きなスリットが入つていて。そうなると、脚でも組んだら私の太ももが見えちゃう。

もう一つの原因是、上半身を覆つていての服装にあつた。通気性、直射日光、蒸し暑さから開放されるためには薄着しかない。でも、隠すことを隠さなきや露出狂として扱われちゃうし、その調節が一番大変なんだよね。薄い生地の衣装を選んで長袖に仕上げてあるんだけど、アクセントなのが胸元。茶色の皮紐を解いちゃうと、これまた成長してない胸元が半分くらい見えちゃうから物凄く大変。そんな? 物凄く大変? 格好を今の私はしているから、父さんが目を丸くするのも無理はない。

見事に靴の先から若さ溢れる御御足おみあしが露出して、どんな拍子でなつたのか分からぬほど胸元は露になつていた。

最悪なことに、そんな考えに行き着いてしまう最大の原因是、あと数センチで私の脚に触れちゃいそうな距離にセイムが倒れてたら、とんでもないことになっちゃってる。

胸元を片手で覆い、もう片方の手で露になつた脚を慌てて隠し、後退りするよにずるずる下がる。

「こんな今日会つたばかりの男と、何もヤつちやいだらうな?」

「とつ、当然でしょ。サンドアルマジロに追つかれられてた状況で、そんなことできると思つの? 彼氏ができたら、とつぐに父さんに教えてるよ」

何か説得力のない言い訳をしてる私。事実、セイムとは何もない。

神に、空に、何でもいいから、とにかく誓つて何もない。

「そうだよな。父さん命のお前が、こんな若い男とあるわけないよな。それに、体中、すすぐだらけだしな」

스스？

はつとした私は、思わず衣服に付いたすすを見やつた。  
「あれ？ どうしてすすなんかついてるの？」

「多分、原因はこれだな」

見当がついてる様子の父さんは、何かを探すように床に目を配っている。そういうえば、スタン・ライト・ガンが見当たらない。まだ氣絶しているセイムをほつたらかしにして、私は不自然に火照つたせいで呆然としてしまって何もする気が起きなかつた。断じて、疲しい行為があつたからではない。

「おつ、やつと見つかつたぞ」

父さんの声にハツとして向いてみると、かなり離れていた。探し物を手に戻つてきた父さんは、やつぱりと言いたげな顔をしている。「はあ、トーラン、お前は力加減というものを知らないのか？」

「銃を撃つのに、力加減なんているの？」

「コイツだけは例外だ。この銃は、充電倉<sup>バッテリーバック</sup>に充電されている。それを弾として発射するには、トリガーを引く。ココが問題だ。一般的の火気は、引き金を引くごとに弾が発射されるが、この銃は引き金を引きっぱなしにすると、それだけ電気球がでかくなつて、充電を使い切るまでそいつはでかくなり続けるんだ。ほら見る、充電ゲージが空つからだ」

把握部分には充電残量を示すゲージがあつて、そこには停止した機械のように発光して表示していない。ということは、私は、充電されている全ての電気を一つの弾に収束し、サンドアルマジロに放つたつてことになる。でも、その瞬間が覚えてないんだよね。

「でも、そんなこと教えてくれなかつたじやない、意地悪う。分かつてたら、乱暴に扱つてなかつたよ」

「そこは……俺の娘であるからして……加減ができると思つたんだよつ……」

変に年甲斐もなく逆ギレを起こし地団駄を踏み鳴らす父さん。ち  
ょつと、これだけはやつて欲しくないよ。……

「じゃあ、ものすごく大きくなつた電気球のせいで、私とセイムは  
氣絶しちゃつたんだ」

はあ～良かつた。これで、セイムとの不純異性交遊が潔白だつて  
ことが証明されて。これで心置きなく、父さんを一途に好きでいら  
れる。

心底安心していた矢先、やつと氣絶していたセイムが起きるなり、  
髪がしわくちゃになつた頭を何度も振る。相当、電気ショックが  
効いたらしい。

「あれ？ ここは」

「俺のホバークラフトの上だ、兄ちゃん。調子はどうだ？」

さつきまで不謹慎に扱つっていたのに、コインをひっくり返すよう  
に具合を尋ねている。

「いやあ、びっくりしましたよ。突然体が痺れちゃつて、お陰でな  
んか体が軽くなりましたよ」

「おお、そうか。この銃が健康器具として使えるのか。すごい発見  
になるぞ」

そんな治療方法がどこにあるんだつて、一人にビンタを食らわせ  
たいと思つたんだけど、私の寛大な心にある自制心は押し止める。  
「そんなわけ、ないでしょ……」

呆れて物も言えない状況に追い込まれる私。二人は、いい発見が  
できて喜んでいるけど、どこが嬉しいのか発端が分からぬ。

気づけば、地平線の彼方に大きく存在感を示していた夕日が沈も  
うとしている。灼熱地獄だつたこの地も次第に涼しくなり、体感温  
度もそこそこに動きやすくなつてくる。

「もうじき陽が沈む。どこかいいポイントを見つけて、野宿するか  
いち早く提案する父さん。長年の経験上、夜間の走行は危険と隣  
り合わせであることを知つている。その上、夜間は視界が利かない  
ため、サンドアルマジロのような敵がいつ襲撃してくるか分からな

い。 それらを考慮して、今日のところは野宿となる。

「私、野宿大好き！」

こんな人気の無い砂漠で父さんと一人っきり。 こんなベストな状況など一度もないよね。 その上、私が父さんのために料理を作つてあげて、焚き火を囲つてお食事タイム。 案外、砂漠つて夜になると冷えるから、『寒くなつたね』とか言つちやつて、くつついて食べさせてあげる。 くううつ、なんてロマンチックなの。 今日は、とことん甘えちゃおうかな。

一人ムフフな私を差し置いて、邪魔者<sup>セイム</sup>は慌てた様子で父さんに縋り付く。

「こひ、これから野宿するんですよね、そうですよね。 そうなると、食べるものは……どうなるんですか？」

チツ、こいつがいたか……

「心配すんな。 たらふく食つちまうだけの量は積んじゃいないが、兄ちゃんが困らない程度ならある」

「そうですか。 いやあ、すいません。 飯まで食べさせてもうれるなんて、感謝の言葉が見当たりません」

「感謝なんてしなくていいさ。あの続きを聞かてくれればよ

「さつきからちゅうちょろ付け回して、何か俺に用か？」

「へつ、知れしたことよ。 ?孤立の闘士?と呼ばれるお前を倒せば、俺達の名声がぐんと上がるもんさ」

黒い外套を纏つたグレイ色の瞳の青年を、三人の俗に言つチンピラが夜陰の行き止まりに追い詰めていた。 人通りの少ない時間帯、出歩くほうも無警戒ではいられるはずはない。 しかし、光と闇。 昼と夜が表裏一体であるように、善があるところ悪も存在している。

「ほう、俺を倒す気なのか。 それも、三人で。 何とも、小心な奴らだ」

「いっ、いくらでもほざけ！ 倒せばいいんだ。 どんな手でもな」

貶され向かつ腹が立つ状況だが、青年の放つ威圧的な雰囲気に氣

圧され、虚勢が本当に虚勢になる。

三方を高い塀が取り囲むようにしてそびえ立ち、唯一の通路を三人の男達が塞いでいる。こんな優勢な位置を陣取っているはずが、男達の焦燥は計り知れない。

「どんな手を使うんだ。まさか、腰にぶら下げた玩具でも使う気か？」

冷静に告げただけといつのに、男達は慌てふためき一斉に腰に目をやる。

「玩具かどうか、お前に試させてやるぜ！」

虚勢を振り切り、男達は腰に差している金属製の円筒形の筒を振るう。それぞれ利き腕に持つたと同時に、筒から青白い光の帶が突き出る。

「そんなもので俺が倒せると思うのか。たかが三人で」

「うるせえ！　お前」とき屁でもねえ！」

それぞれ武器を持つた男達は、恐れを振り払うかのように飛び掛る。この時点で、黒い外套の青年はまだ武器を出していない。身構えもしなければ、身動き一つさえ起こさない。

刹那、大気の変動が起こる。

「……終わつたな」

ため息のような一言をもらした時には、立ち位置は鏡に映るようになに変わり、状況も容姿も様変わりしていた。

背丈ほどの大剣を軽々片手で持つたまま振り返ると、さつきまで追い詰めていたはずの男達が地面で伏せている。それも、寸分狂わず急所を射止めている。

瞬時の出来事の間に、黒い外套の青年は一体何をしたのか。これでは、お互に何が起こったのか分からない。ただ知るのは、青年であるのみ。

「また、無益な殺害を起こしてしまった……」

研ぎ澄ました大剣に映る自分の姿を見据え、青年は祈りそして剣を収めた。

灼熱地獄だつた昼間とは打つて変わり、太陽の沈んだ砂漠はシンとして静まり体感温度は低下する。

小高い砂丘の陰にホバークラフトを停車し、質素だけど楽しい嬉しい夕食を取る。

「いやあ、旨いですね。とにかく味付けに凝つて美味しい料理もいいんですけど、火にあぶつて味付けは塩だけのも、これはこれでおいしいですね」

砂漠で拾つたのが運のツキだつたみたい。どうしてこんな見も知らない男のために、私は下「」しらえして料理を作つてるんだろう。せつかく、父さんと一人つきりで夕食が食べられると思ったのに、この男を拾つたお陰でサンダアルマジロには追われるわ、武器の使い方を誤つていらない心配をかけるわで、もつ本当さんざんな一日になつた。

「分かるじゃねえか兄ちゃん。やっぱ、料理は、しんぶるいはずすとに限る。訳の分からん味付けされる食材も、かわいそうなもんだからなあ」

父さんは一日の疲れを癒すため、持参してきた酒を一人飲んでいる。出した肉の串刺しを酒の肴にして、時々、セイムにも酒を勧めるけど断つている。

結構気がきいてるじゃない。父さんならまだしも、他人様の面倒なんか見れないし見る気もない。

かなりお酒が入つたらしく、父さんの顔は日焼けしたみたいに真っ赤に染まつて、呂律も回らなくなつてている。

「もう下「」しらえはいいから、お前もこっちに来て食べろ」「は～い

熾した（おこ）焚き火を台所、明かり、暖房として使う周りで、父さんと厚かましくも一緒に食べているセイムの所に行く。

「いやあ～拾つてもらつて、その上昼飯も食べさせてもらつたし、その上更に夕食も一緒にありつけるなんて、ありがたいことばかり

続いて怖いぐらいです」

「へツへツ、そんな怖がらんでもいいだ。取つて食つよつなマネはしねえよ」

もう、今の父さんなら、何を言われても怒らない状況まで陥つてゐみたい。ああ、あま~いひとときが水の泡に……

「さあ、もつと食つた食つた。若いもんは、食欲旺盛でなきやいねえ」

「えつ、父さんもういらぬの?」

完全に酔いがまわつてゐる父さんは、最後の一杯を一気に呷りむくつと立ち上がる。

「なんか疲れちまつたみてえだ。一足早く眠らせれもりづぜ」  
お酒の入つたビンを片手に焚き火から離れ、一人ホバークラフトへ向かう。

「兄ちゃん、あの話の続きを今度聞かせてくれや」

「えつ、あつ、はつ、はい……」

本人さえ分かつていないような曖昧な返事を返し、両手の串刺し肉を頬張る。

「ちよつと、人の分まで食べないでよね」

「こひどばかり、夕食のお肉をほつたらかしにセイムに一言残し、眠りにつこうとする父さんの後を追いかける。

案の定、でろでろに酔つた父さんの行動は危なつかしくて、側で手を貸さなければいけなかつた。フフフツ、これはチャンス

「ほら、危ないじゃない。まったく、私が付いていないといけないんだから」

「すまんな……つて、まだ、老いぼれてなんか、なあ~い!」

私の肩に腕を回して肩を貸しながら、父さんはうわ言とオーバーに片腕を振り回す。

「そんなんに暴れないでよ、倒れちゃうじやない」

寝床に使う荷物置き場に着き、父さんを床に寝かせる。寝心地は良くないけど、体に染み付いた感覚のおかげかせいか、冷たく固い

床の上ならどこでも寝れちゃう。

「すまんな。まだメシ食つてないんだろ?」

「いいんだよ。私の大切な父さんのためなら、一日抜いたつて平氣だもん」

「まあ、大概は挫折するがな」

寝ながらヘラヘラしてゐる父さんに、毛布を掛けあげる。くう、私つて優しいつ！ 絶対、後で添い寝しちゃおつと。

「ちゃんと掛け寝るんだよ。風邪引いて倒れちゃだめだからね」

「それは、親が言うことだらうが」

「そうだね。おやすみ……」

予備の毛布を枕代わりにした父さんは、あつといつ間に睡魔に襲われ豪快なイビキを始める。

さてと、早く食べ終わつて片付けて、父さんと一緒に……

これから控える計画を実行するためには、動き出さなきゃいけない。まず、夕食を済ませないと。

ホバークラフトから戻つてみると、焚き火の側にあつた串は綺きれいに消え、一つの皿に重ねて置いてあつた。

「あつ、ちゃんと残してくれたんだ。てつきり食べたつて思つた」「言われた通り残しておいたのに、お礼もなし？」

「うんん、ごめん。ありがと」

砂漠を撫でるひんやりとした風に寒さを感じ、焚き火の側に寄る。

「お父さん、寝たの？」

「うん。あつといつ間にね」

私が食べる横で、セイムはせつせと守つてくれた手作りのレーザーブレードを手入れしている。無機質な金属製素材の円筒形をしたそれを、手持てるボロ布で磨いている。

「それにしても、スゴイ数の星だな！」

「えつ、星？」

ふとセイムが口にしたので、私も思わず空を見上げる。

雲も何も遮蔽物のない暗闇から、淡い点滅を繰り返してゐる明るさ

の違う様々な色の星達。見上げてみると、その数の多さに圧倒され星達が落ちてきてもおかしくないとと思う。

「そうだね。気づかなかつたけど、こんなに多くの星が空一面にあるなんて、信じられないよね」

「こんなにはつきり見えたの、久しぶりだよ」

「そういえば、父さんが言つてたんだけど、私達が生まれる前つて星がみえなかつたんだって」

「ウソだろ？ こんなに明るく見えるのに、前までみえなかつたつて！？」

本当にセイムには信じられないようだつた。

「それまで、機械文明が発達してたでしょ。そのために、空は有害なスモッグで覆われてて、何年もの間、星はおろか太陽光まで差し込まなかつたんだけど、機械文明が滅びて何年か過ぎてようやくスマッジが消えて、こうやって空が見えるようになつたんだって」

「へえ～、それまでは太陽なんて見れなかつたのか。さぞかし寒いんだろうな。俺、寒いの苦手」

苦い顔をして、セイムは武器を眺める。

「それよりすごいのが、どうやって有害なスモッグを消したのかつてことなの。どうやつたと思う？」

私が質問してみると、セイムは信じられないほど悩みました。あまり考えるということをしないみたいで、みるとみるうちに眉間に皺が寄つていく。

「えっと、機械の文明は滅びたわけだから、人間は……どうやつたんだ？ ああああ！ 分かんねえ！」

腕を組んだり顎を撫でたり、頭を搔きむつたり、頬をつねつたり？ しながら、自分に備わつてる英知を振り絞つてセイムは考える。仕草を見るだけでも面白いけど、これ以上苦しんだら頭の血管が破裂するんじゃないかと思つて、仕方なく答えを教えてあげる。「フツ、フツ、フツ、降参みたいね。まつ、あなたみたいな人が、柔軟な思考能力があるとは思えないもんね」

「うぐつ、悔しいが、反論できない……」

苦虫を噛み潰したように、悔しさを堪えている。

「じゃあ、教えてあげる。それはね、自然の（ラル・）<sup>ナチュラル</sup>力<sup>パワー</sup>が有害な物質を中和して、空気をキレイにしたんだって」

「ウソだろ～、信じられるかつて」

「ウソじゃないよ。父さんが言ってたんだから」

「何か、信用していいんだか自信が持てないけど、その人が言うからにはそうなんだろう。いや、そうなんだ。そうに決まってる！」

大袈裟なリアクションをしながら、セイムは一人変に納得している。私の父さんを信用してくれるのはいいけど、素直な反応には見えないんだよねえ。

「それより、どうして砂漠の真ん中で倒れてたの？」

その間に食事は終わり、空となつた皿を足元に置く。

「どうしても知りたいの？　あんまり言いたくないんだけどな……」

「どうして隠そうとするかなあ。せっかく拾つてあげた上に、介抱までしてあげた命の恩人に隠し事をするの？」

「だつてさ、聞いた途端に絶対白い目で見るに決まってるからさ、言いたくないんだ」

「そんなの、聞いてみないと分かんないじゃない。それに、反応は人それぞれだし」

「でもなあ……」

どこまでもセイムは言いたくないようだ。

「じゃあ、障りだけ教えてよ。教えたくないところは省いてもいいから、支障がない程度にね」

「……しようがないなあ」

渋々了解したセイムは、愛用の武器を後ろに隠し切り出した。

「剣闘士シャープス・ダットンって聞いたことないか？」

「ええ、もちろん。コロセウムに現れた偉大な英雄でしょう？」

「そう、機械文明に支配された世界で、独り生身の人間として戦つた英雄。その勇気、意志は虜められていた人々の心に希望の光を灯

し、機械たちから解放した勇敢な男。その彼が戦つたコロセウムを、俺は目指してゐるんだ。彼同様、生身の人間として

とてもなく大きな夢と同時に、こんな男が出れるわけもないの

にと、半ば呆れ果ててため息が漏れる。

「あのね、「コロセウムを目指すとおっしゃいましたが、あの場所には選ばれた者しかいけないことをご存知? そこまで至るには、コロセウム運営委員会が定めた大会を勝ち抜かなければいけないんですけど」

「えつ、そうなの? ポジング精神でなんとかなるよ、きっと」

世間知らずもいい加減なぐらい、この男はあっけらかんとしている。

「そんなちゃつちい精神なんかで、通過できるような関門じゃないつて」

「そんなこと、知ってるさ……」

と、急に表情が険しくなる。何よ、何なの、この真剣さは。

「参加者の三百人に一人しか辿り着けない、難関だつてことは百も承知してる。でも、俺は、英雄と呼ばれたシャープス・ダットンが戦つた場所に、行つてみたいんだ」

瞳に宿る強い意志。勇敢な戦士のような気迫漲る顔。それは、さつきまでメシのことばかり考え、ヘラヘラしていたセイムとは似ても似つかない。

「……」

私はそんな男らしい表情に見惚れて、じつとセイムを見据えていた。私らしくない。こんな、私とたいして歳の違わない男に気があるなんて。

「んつ、俺の顔に何かついてる?」

「えつ! いつ、いやあ、別に何とも……」

ああ、どうかしちゃつたみたい。こんな、カッコイイ表情は父さん以外いないと思ってたのに。

「もしかして、白目でも剥いてた?」

「はあ？」

「時々物凄く考え込んでると、知らぬ間に白目になっちゃうんだ。

やつぱり元のセイムに戻ると、脳のドキドキ感はあつとこつ間に

冷めちゃう。こんな男に憧れを抱くだけ無駄みたい。

「そういうことに、してあげる」

「えつ、何か言つた？」

「なんでもない」

やつぱり魅力を感じるのは、父さんのような年上の男しかいない。

セイムに憧れが芽生えちゃったら、その時はかなりの病氣ね。

「そういえば、あなたってこくつななの？」

「こくつに見える？」

「そうね、十七ぐらじじゃないの。私とあまり変わらないみたいだから

「おお～近いねえ。残念でした、八十一です」

「ぜんぜん近くないじゃない。何が八十一よ。父さんより年上のは  
すないじゃない。」

「え～っ！ ウソでしょ！ って、もつとましことを語つてよ」

「ちえつ、引っ掛からなかつたか」

「引っ掛けられないでしょ、普通」

「つまんないの。俺の歳は逆だよ。十八」

「そうかと思つたけど、私より一つしか違わないのに、こんなに精神年齢が低いなんて先行きが思いやられる。

「そうですか。想像はつきましたけどね

「何か、反応が冷たい」

「気のせいです。さつさと寝たらどうなの。夜が明けたらすぐに出  
発するからね」

「そんなどりくわづかうつよ」

「じゃあ、また地獄のような暑さを体験したいの？」

「この言葉が利いたのか、言葉を飲み込んだセイムは、黙つてホバ

ークラフトの方向に歩いていく。

「あつと、あなたの寝床は運転席だからね。荷物置き場には近づかないこと。わかつた?」

「りょーかーい』

力なく手を振ると、セイムは一つ大きなあぐびをして運転席の方へと消えていった。

さあーて、後片付けと火の始末をしたら……うふふふつ  
妙な妄想の中、私が作詞作曲した鼻歌混じりに後片付けにはいる。  
もうこんな状態になつたら、料理の一人前も百人前も一緒に。どんな  
に苦痛と思うことも、お構いなしにこなせちゃう。だつて、嬉しく  
てうずうずしてゐるんだもの。

最後の工程として焚き火の火を消し、薄暗い中で一つ一つ指先で  
確認していく。うん、全て完了。後は……

「父さんと一緒に寝てるだけ……」

この時だけは、それまで歯止めをしている自制心も全開。世間の  
視線なんて知つたこつちやない。私の思つまま、為すがままにでき  
ちゃう。

ホバークラフトの後部から荷物置き場に入り、簡単な照明灯しか  
照らし出すものない場所で眠つている父さんを探す。

足元まで光は届かず、せいぜい胸の下辺りまでしか視界に捉えら  
れない。

さあーて、どっち側で寝ようかな。大きくて立派な背中にしよう  
か、それとも父さんの寝顔を見ながらかな。うーん、どうしよう。  
迷っちゃうなあ。

「でも、お酒飲んじゃつてるから、背中に寄り添つて寝よう」  
起こさないよう細心の注意を払つて、暗闇に慣れた瞳でやつと父  
さんに掛けた毛布が見つかる。

「お邪魔なセイムは運転席に追いやつたし、やつと親子水入らずな  
時間が過ごせる」

田の前にある嬉しさに耐え切れず、私はすぐさまに寝てゐる父さ

んの背中に擦り寄る。

「ああ～、あつたかい背中」

頬擦りをしようとした顔を近づけると、奇妙な周期で聞こえてくる一つの寝息。確かに寝ているのは父さんだけのはずなのに、どうして……

私は毛布に包まつて寝ている人を確認する必要があつて、恐る恐る毛布を払つてみる。

「うわっ！」

虚をついて発してしまつた口を覆い、これ以上声が聞こえないよう後退りする。必死に今あつた出来事を正当化しようと思つても、中々そう簡単にはいかない。

私が見たのは、特等席とばかりに運転席に追いやつたはずのセイムだつた。ある「こと」とか、私の大事な父さんと添い寝してゐるし、二人で使うならまだ許せるけど、父さんに掛けたはずの毛布を独り占めしていたのだ。

そんな状況を見た私の寛大な自制心では制御しきれず、蓄積した負の力はなおも増幅していく。

セ・イ・ムウウウウ！

一瞬意識が飛んでしまつたかのように、私の意志をも凌駕した激怒の念に突き動かされ、セイムが羽織つてゐる毛布を力ずくで引っ張る。

が、しかし、ちゃんとしつかりしてゐるセイムは、寝てもなお毛布を手放す気などなくしつかりと掴んでいる。となりに寝てゐる父さんが可愛そう。

「離しなさいよ、父さんが風邪引っちゃうでしょ」

大声で怒鳴つて奪い返したいところだけど、熟睡してゐる父さんには迷惑なんてかけられない。でも、早く父さんに毛布を掛けてあげたい。

強引に思い切つて引っ張つてみると、案外簡単に取れたと思ったのに、反発して起ころる力の暴走に逆らえず反対方向へ体が飛んでつ

てしまった。

「いつたつ……」

毛布に全神経を傾けていたせいで、背中にかけての外側を強かに打ちつけてしまった。衝撃音は一瞬で、痛みをこらえる私以外誰にも気づかれることがなかつた。

全身を毛布で包まれた私は、数秒間事態を飲み込めずじたばたして末にやっと這い出る。

もう、何なの、私ばかり損して。

やりきれない思いを噛み殺して、やつと寒さが身に沁みている父さんと、気が進まないけど、セイムのために毛布を掛けてあげることにした。

「もう……どこで寝ればいいって言ひの」

私のベストポジションをセイムに取られ、一番安心のできる場所を追いやられた私は、一体どうすればいいのか。

とりあえず予備の毛布を持ち、薄暗い荷物置き場を当てもなく探す。絶対同じ場所に寝てたら、父さんにしか見ることを許せない寝顔をセイムにも見られる可能性がある。でも、父さんの側だけは離れたくない。

結果、行き着いたのは、

「運転席で寝よ。朝日が出たら、一番に起きられるしね……」

皮肉つた一言を呴き、私はセイムを一生恨む覚悟を胸に妥協したのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7088f/>

---

フルメタル・ブレイカー

2010年10月10日07時04分発行